上尾歴史散歩 326

～昭和30年代の上尾～

昭和33年7月15日に市制施行した上尾市は、ことし市制施行60周年を迎えます。平成30年4月号から平成31年3月号までの上尾歴史散歩は、昭和30年代当時の広報誌『上尾自治だより』から、当時の出来事やその背景などを探ります。

写真2　田摘み（播種）

写真1　『年中行事むかしむかし　日本むかしむかし4』

五月節供（句）のおこり 稲作と年中行事

昭和32（1957）年4月20日発行の『上尾自治だより』第28号には、「元来は女の日　▽五月節供のおこり△」と題した記事が掲載されている。これは、昭和30（1955）年発行の『年中行事むかしむかし　日本むかしむかし4』（写真1）を引用して書かれたものである。

現在では「男の子の節供」「こどもの日」などといわれている五月節供は、田植えで活躍する早乙女（早処女）の物忌み行事とされている。このため、各地で5月5日を「女の家」といったり、ショウブの葉を使って邪気をはらう伝承があるとしている。田植えとは、苗代と呼ばれる田に、稲の種もみを播いて苗を育て、この苗を田に移植する農作業の手順である。しかしながら、市域では、田植え方式による稲作はほとんど行われず、主として摘田（写真2）と呼ばれる直播きの稲作が伝統的に行われてきた。

農業が中心の時代、ほとんどが台地上にある市域では、主要作物は麦・小麦・サツマイモなどで、畑で生産されていた。一方、田で行われる稲の生産はわずかであり、明治40（1907）年の段階で畑が8割、田が2割であった（『北足立郡事一班』）。

市域の田は、用排水路の設置が困難な地理的制約から、台地の谷底部の低湿地帯にあり、水は台地際からの湧水などに頼っていた。また、田植えが広く行われる旧暦5月5日（新暦の6月上旬）の頃は、麦・小麦の収穫時期に当たり、極端な農繁期となることから、同じ時期に田植えを行うことは、人手が足りず困難となった。このため、摘田によって稲の直播きを1カ月ほど早い時期に行い、農繁期の仕事を少なくするという意味もあった。

このような稲作は、第2次世界大戦後まで継続してきた。転機が訪れたのは、主として麦の生産の低下である。また、農業機械としての揚水ポンプの整備や稲の品種改良に伴い、台地上でも水田耕作ができるようになっていった。この結果、『上尾自治だより』の発行から程なくして、田植え方式による稲作が多くなり、昭和40年代には摘田による稲作は、ほぼ消滅していった。

季節と密接な関わりを持つ五月節供は、田植えを行う早乙女の物忌みであったという本来の意味を形骸化し、今日を迎えている。一方で、摘田では、五月の節供前までに播種（田摘みという）を行い、これを終えると「木綿坊主」と呼ばれる祝い行事をした。大福餅やあんころ餅を作って祝うもので、近年まで伝承の中で残ってきた。市域で行われてきた摘田に関する年中行事は、伝承だけが現在でも息づいている。

（上尾市歴史民俗研究会）

あの頃の広報

『上尾自治だより』第28号（昭和32年4月20日）

元来は女の日

▽五月節供のおこり△

昔は田植は女の仕事であった田主（たあるじ）という男の指導者のもとで、女たちが総動員で苗を植えるのだ。田植は農村での晴れの行事だから、このときは「田植着物」などといわれる正式の仕事着を着た。

田植の花形は何といっても「早処女（さおとめ）」である。紺の香のにおうばかりの仕立ておろしの野良着、紺の手甲（てこう）、脚絆（きゃはん）に目にもあざやかな赤ダスキ、白い菅笠（すげがさ）

いまでも農村の娘たちは田植を前にして、この田植着物を縫う。

この田植の前の晩、女たちだけで精進の一夜を過ごすのが五月の節供の起りで、近松門左衛門の「心中天網島」のなかにも、「五月五日は〝女の家〟という」との言葉がある。今でも、高知県長岡郡や愛知県の一部などには　この五月五日を〝女の家〟という言葉が残っている。旧暦でゆくと、五月六日前後に田植が行なわれ、いつか五月五日が〝女の日〟ときめられたのだそうだ。元来〝女の威張る日〟であったのだが、武士の社会になってから、いつのまにか〝男の節供〟にすげかえられてしまったのである。

ただ田植のとき、女がなくてはならぬ大事な働き手であることは、むかしもいまもかわりがない

田植のときは、農家ではだれもが朝は暗いうちから、夜遅くまで働きつづける。

なかでも腰をかがめたままの田植の仕事はやったものにしかわからない、つらい仕事だ。

田植歌に、

五月田植に泣く子が欲しや
あぜに腰かけ乳のまそ

というのがある。

赤ん坊に乳をのませている女を見て、「ああ、いいなあ。わたしもあして、ひと息つきたいなあ」と思う、せつない気持を歌ったのだ。

いまでも五月五日を〝ショウブの節供〟といい、ショウブを軒にさしたり、ショウブ湯をたてたりするのは、ショウブで邪気をはらう風習からきているといわれているが、物忌み――謹慎生活をしているというシルシに、ショウブを屋根へさしたのが初まりという説もある。

この日に武者人形を飾ったり、鯉幟（こいのぼり）を立てたりするのは、武士の家でやりはじめたことで、ずっと後世のことである。

（日本むかしむかし「四」による）